

常盤孤を抱くの図に題す（梁川星巖）

雪灑笠檐風捲袂  
他年鐵柺峰頭嶮  
呱呱覓乳若爲情  
叱咤三軍是此聲

解説 源 義朝の妾常盤が三人の孤児をともなつて逃がれてゆく雪中苦難のさまを描いた図に題した詩。

雪は 笠檐に 灑いで 風 袂を 捲く

呱呱 乳を 覓むるは 若為の 情ぞ

他年 鉄柺 峰頭の 嶮

三軍を 叱咤するは 是れ 此の 声

語釈 ※常盤 源 義朝の妾となり、三児を生んだ。今若、乙若、

牛若を抱いて大和の里に隠れた。牛若は後の義経である。

※笠檐 編み笠のひさし。ふちの部分をいう。※呱呱 赤児の

喘ぎごえの形容。※若為情 どんない心持なのか、赤児のことで

なにもわからないだろうにの意。※他年 後年。二十五年後の

一の谷合戦のこと。※鉄柺峰 六甲山に属する峰。義経が一の

谷の平家の陣屋に奇襲をかけたとき、鴨越の逆落しを試みた。

※三軍 大軍。※叱咤 大声で指揮して励ます。

通釈 雪は絶え間なく常盤の笠に降りそそぎ、肌を劈く寒風は

常盤の襖を捲きあげる。三人子供を連れて、追手を逃がれでさ

まよう常盤の姿は見るも痛ましい。牛若は空腹を訴えて乳を求

めているが、どんな気持でいるのか、なにもわからぬだけに、

かえつて不憫である。時移り義経は平家追討の軍を進め鉄楊峰

上に立って、大軍を指揮して鴨越えをいつきに駆けくんだり平家

の軍勢をうち破った大将の声こそ、空腹を訴えて乳を求めている

義経の声に外ならないのである。